

(京都西南部)

1 所在地 一 京都府向日市鶏冠井町門戸、二 向日市鶏冠  
井町南金村  
2 調査期間 一 一九九六年（平8）七月～一月、二 一九  
九年四月～七月  
3 発掘機関 財団法人市埋蔵文化財センター  
4 調査担当者 一 中島信親、二 山中 章・國下多美樹・中島  
信親  
5 遺跡の種類 都城跡  
6 遺跡の年代 長岡京期（七八四～七九四年）  
7 遺跡及び木簡出土遺構  
の概要

一九九六年度に、長岡宮跡及び長岡京跡で新たに木簡の出土した調査は四件ある。宮二件（長岡宮第三二九次・三四一次調査—いずれも春宮坊跡—）と左京二件である。宮二件の調査は、

## 京都・長岡京跡

現在遺物の整理中であるので、本稿では、左京二件について報告を行なう。

### 一 左京二条二坊五・六町（左京第三八一次調査）

調査地は桂川の氾濫原に位置し、現地表面の標高は約一四・五mを測る。長岡京の条坊復原では左京二条二坊五・六町にあたり、東院跡（左京二条二坊十町）の南西、太政官厨家跡（左京三条二坊八町）の北に位置する。調査地の東約八〇mで行なわれた左京第三三〇〇次

調査では、二条条間南小路と東二坊坊間小路の交差点相当地から、各条坊側溝と掘立柱建物一棟、東二坊坊間小路路面から、いずれも東側柱筋を揃える礎石建物一棟、掘立柱建物二棟を検出した。この結果、左京二条二坊五・六町は、十一・十二町と共に、長岡京後半期には最低四町を一括した土地利用が行なわれていたことが明らかになつてている。

本調査地の検出遺構も、切り合い関係から前・後期の二時期に分けられる。前期の遺構には、二条条間南小路と南北両側溝、築地雨落溝などがあり、五町と六町とはそれぞれ分かれて利用されていたことがわかる。後期になると条坊側溝は埋めたて整地され、掘立柱建物SB三八一〇五、その周囲をめぐる溝などが設けられる。建物SB三八一〇五は身舎五間×二間、南・北に廂を持つ東西棟で、身舎の柱間は三・〇m（一〇尺）等間、廂の出は二・七m（九尺）である。宮二件の調査は、

主な出土遺物には、平城宮式軒平瓦、寺院系長岡宮式軒瓦、壇、土師器、須恵器などがある。木簡は一点で、掘立柱建物SB三八一〇五の南廂の西から二間目の柱(P四)の柱抜き取り穴から檜皮などと共に伴して出土した。

本調査地周辺は、長岡京や平安京では、離宮と宮外官衙の立ち並ぶ一帯である。特に条坊交差点を埋め立て、四町の区画をつくり、その中心に礎石建物や一〇尺単位で割り付けた建物群を配するあり方は、一般的な邸宅とは考えにくい。また建物では、原則的に宮城にしか用いられない鬼瓦や壇が出土していることも、この宅地利用者が公的な存在であることを示している。史料には、長岡京期後半に初見する離宮が四例ある。東院、南院(園)、猪隈院、木蓮子院である。一方、平安京には、左京一条二坊三・六町に冷泉院があり、本宅地の西を限る東二坊坊間西小路は猪隈小路と呼ばれている。本宅地は『日本紀略』延暦一年(七九二)正月甲子条に射礼を行なつたとみえる「猪隈院」の可能性もある。

## 二 左京三条三坊八町(左京第三八七次調査)

調査地は、標高一三・七mを測る氾濫原に位置する。推定では二条大路南側溝を含む左京三条三坊八町北東端に当たる。調査の結果、推定位置で二条大路南側溝を確認したほか、側溝内に杭を打ち込んだ痕と、これに連なる溝を検出した。南側溝SD三八七〇一は、幅五・五m、深さ〇・五m・七mを測る濠状の東西溝である。埋土

は三層に大別でき、上層が黒紫色シルト、中層が黒灰・暗灰色砂混じりシルト、下層が灰色砂礫である。層相からみて一定の水量を常にもつた溝と考えられる。調査地中央に杭列SX三八七〇五~〇七が設けられ、八町の宅地内へと分流する南北溝に導水していた。

木簡は、二条大路南側溝SD三八七〇一から九点出土した。五点は南肩付近の上層から出土し、残り四点は杭列SX三八七〇五付近の中層から出土した。側溝の共伴遺物には、長岡京期の土器類のかか、瓦壇類、刀子、人形、斎串、墨書き面土器、獸骨がある。

### 8 木簡の釈文・内容

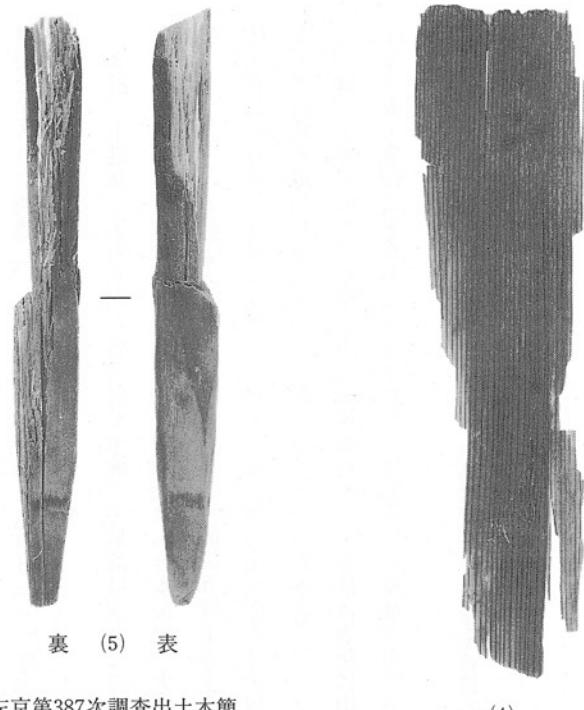
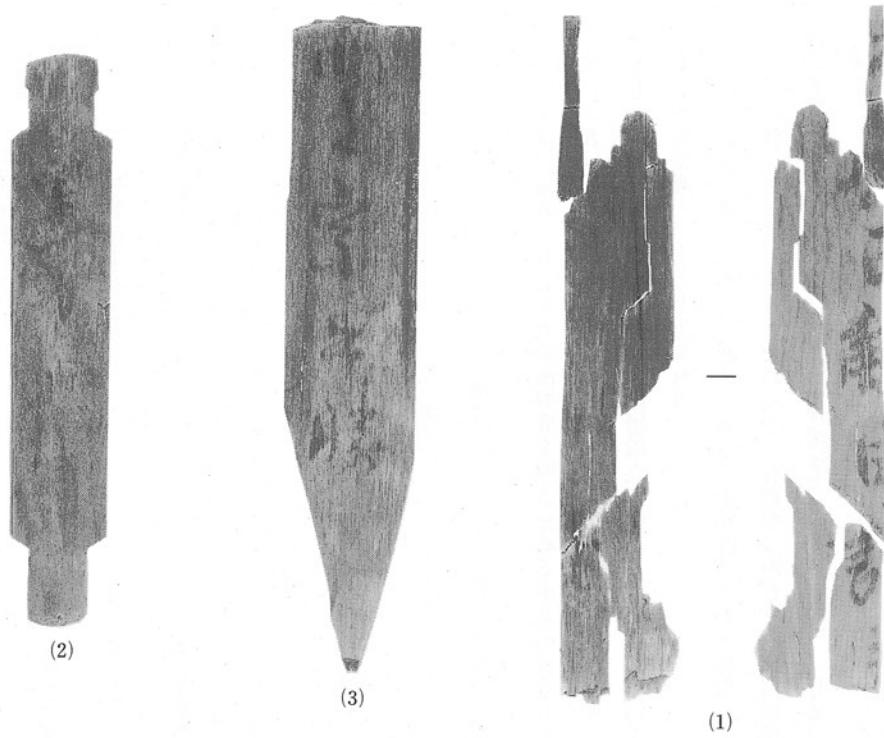
#### 一 左京一条二坊五・六町

(1) 「▽但馬国出石郡資母郷□□マ勝魚五〔斗カ〕  
〔人カ〕 282×17×5.5 031

上・下端部共に側面ケズリで調整し、やや圭頭状を呈する。表裏両面はケズリで調整し、下方ほど厚みが増す。左・右側面は割りさく。上部の切り込みは上端部から一一mm、下部の切り込みは下端部から二六mmの位置に刻む。いずれも「▽」字形(キリカキ)。完形の貢進物付札であるが、墨が薄く、赤外線テレビカメラ装置で文字を確認した。内陸部のため「魚」は川魚か。「五斗」は「五十」の可能性もある。

#### 二 左京三条三坊八町

1996年出土の木簡



左京第387次調査出土木簡

・「内膳正解申請□×

・「 □」

(131)×(22)×3 081

「▽黒米五斗▽」

105×18.5×3 031

「豊宗牛勝」

120×24.5×3 051

□ □

091

(墨線)  
□ (右側面)

□ (裏面)  
□ (左側面)

(108)×(12)×6 059

(2)は、ほぼ完形の物品付札。上・下端共に側面ケズリで調整する。表面をケズリで調整し、裏面は未調整。切り込みは「▽」字形（キリカキ）ではなく、台形（キリオトシ）を呈する。

(3)は、下端部を尖らせた人名の付札木簡。上端部は表面にキリ目を入れて裏面へ折るキリ・オリ技法。豊宗氏は『日本後紀』大同二年（八〇八）一〇月「西条初見の主税頭兼大外記從五位下豊宗宿祢広人が知られる。長岡京木簡で「豊宗」は一例の出土があり、何れも人名付札と思われる（『長岡京木簡』五六一、一五九九号）。

(5)は、下部を削ってやや尖らせる棒状のもの。上部は等状に損耗する。表・裏面に墨があるが文字か否かは不明。下端部から10mmの位置に墨線を回す。

(1)は、請求文書木簡の上部断片である。上端部は、表・裏面から削る。左側面は一部原形をとどめるが、右側面は割れ。内膳司は長官（奉膳）が一名の官司であるが、神護景雲二年（七六八）二月癸巳の勅によって、高橋・安曇の二氏は奉膳、他氏の長官は正と称した（『続日本紀』）。長岡京期、高橋・安曇両氏が争い、「奉膳正六位上

（一 中島信親、二 國下多美樹  
　　糸文 清水みき）

安曇宿祢継成」が佐渡配流となつた事件が『本朝月令』所引「高橋氏文」や『類聚国史』卷八七延暦一一年三月壬申条で知られている。

二条大路南側溝は長岡京期より新しい土器を含まないので、延暦一三年の廢都時に埋め立てられたと推定できる。したがつて(1)は、長岡京での他氏の内膳司長官（正）の存在を示している。また、この木簡は官職名で上申されている点が注目される。

